

草双紙の洒落言葉 (二)

——どらやき・さつまいも・鯛のみそず・四方のあか——

松原哲子

安永七年(一七七八)刊『こぼれなぐりあからしのね辞闘戦新根』(恋川春町画作、鱗形屋板)には、言葉を擬人化した十人の化け物が登場する。擬人化されたキャラクターは、「大木の切口太いの根」

「二ばいのみかけ山のかんがらす」「ならずの森の尾長鳥」

「放下師の小刀のみこみ印」といった掛詞的な要素を取り入れた言語遊戯の語句が目立つが、その一方で、「どらやき」

「さつまいも」「鯛のみそず」「四方のあか」という飲食物も登場する。これら四つは作中で「どらやき」と「さつま

いも」、「鯛のみそず」と「四方のあか」とがそれぞれ二語

一対となって行動する。

作品の冒頭、作者春町は「大木切口太いの根」に、自分たちが「草双紙の氏神、中興の開山」である根拠として、「寢惚先生の詩集にも出」たと語らせている。明和四年

(一七六七)刊行の大田南畝の『寢惚先生文集』⁽²⁾には、草双紙をテーマとする以下のような狂詩が示されている。

ヨム 読 絵草紙 二一首

アケシフドジルシ 悪人太印 太之根 セシメウルシハイウ 石漆 毎為 二跡式論 一 レドラギキ 不 是 鑼 燒

サツマイモノコロニ 甘蕷 事 一 ヤマフキイロアベン 山吹色 可 証 二 中元 一

ミソアワカトシンビ 見初若殿 忍 二 姫家 一 シバ 磔打忠臣 働 二 命涯 一 タイクミソツツデヨ 鯛味 嗜 津 四

モノアカラ 方酒 一 ツバイノミカケ 一杯 吞 掛 山 寒 鴉

詩中に「太印」「太いの根」「せしめうるし」「一杯のみかけ山のかんがらす」など、初期の草双紙に散見される言語遊戯の語句が使用されていることから、「銅鑼燒」「甘蕷」「鯛

味噌津」「四方酒」も草双紙と結びつく言葉として盛り込まれたものと推定される。また、それぞれが列挙され、二語一対のものとして扱われている。

よって、『辞闘戦新根』の中でこれら四つの飲食物を他の言語遊戯の仲間として登場させていること、また、「ア、せつない どらやきさつまいもは 死ぬにも一緒と見へた 因果な腐れ縁だぞ」(九丁表)と発言させるなど、それぞれを二語一対のものとして位置づけているのは、春町の発想によるものではなく、南畝の見解を踏襲したものであるといえる。

今回は、これら四つについて、現存する草双紙における使用例を編年的に追い、その性質を探ってみたい。

どらやき・さつまいも

草双紙に登場する「どらやき」および「さつまいも」の使用例を挙げると以下の通りである(●印を付したものは、「どらやき」「さつまいも」が列挙されている例である。刊年不明の作品については、題簽の様式などからおおよそ年代順になるように配置した)。

●刊年不明『駒軍象戯始』(鳥居清満画、鱗形屋)

やつはり どらやきさつまいもをたくさんに下され
ませふ(七丁表)

●宝曆十二年(一七六二)『いろは文字／寺子短歌』(鱗形屋)

ふ ぶせひなくせに薩摩芋どらやきなどはきついす
き(七丁裏)

・刊年不明『三官／和唐内雅立』(鳥居清経画、鱗形屋)

今いけへふちめし印 たらやきでもさすでも のぞ
みはないか(七丁表)

※「さす」は「すき」の倒語で酒のこと。「どらやき(甘い物)でも酒でも」の意。

●明和七年(一七七〇)『おなつ清十郎／契約石宝殿』(鳥居清経画、鱗形屋)

どらやきさつまいものうまみより ひいやりとはら
させたところは さそいたからう(十三丁表)

・刊年不明『源太夫』(鱗形屋)

こちのがきは ませたやつだ なかくどらやきで
はいくまいく(二丁表)

御れいにはいつものどらやき ひきのやのあんころ
たくさんにしん上申さん(三丁表)

・刊年不明『おなら』(鳥居清経画、鱗形屋)

ひきのやのあんころ 藤つかやのどらやきは御とり

つけなり(二丁裏)

・安永四年(一七七五)『外濱／善知鳥物語』(鳥居清経画、鱗形屋)

鱗形屋)

おひもじかろう ひさしいものだがどらやきでもし
んせませう(四丁裏)

●安永五年『風流／上下の番附』(鳥居清経画、鱗形屋)

※擬人化され、菓子仲間の「どらやきまる介」「さつま
いものあま吉」として登場。

●安永六年『花見帰鳴呼怪哉』(深川錦鱗作、恋川春町画、

鱗形屋)

山海のちん味はいうにおよばす 鯛のみそずに四方
のあか どらやきさつま芋はふるしとて しほ瀬が
まんぢう 金沢やがやうかん ありとあらゆるむま
いものづくめに(二丁裏)

●安永六年『南陀羅法師柿種』(朋誠堂喜三二作、恋川春

町画、鱗形屋)

お札にどらやきさつまいものたくひはよしにいたし
て 日ほんで名たかいひきのやのどらやきをさしあ
げましやう(四丁表)

●安永六年『三舛増鱗祖』(恋川春町画作、鱗形屋)

これにつけてもなつかしいは ひきのやのどらやき
じゃ さつまいものはなきか いくよもちはをらぬか

でめへく(十丁表)

●安永七年『辞闘戦新根』(恋川春町画作、鱗形屋)

※既出。

・天明二年(一七八二)『御存商売物』(北尾政演画作、鶴屋)

くだりゑほんはあるとき赤ほんくろほんをまねき
たひのみそつに四方のあかをふるまひ あかほんは
ちつとのむと あかくなるゆへ ひきのやのどら印
いだし(二丁表) ※どら印⇨どらやき

・天明八年『悦眞蝦夷押領』(恋川春町作、北尾政美画、

鳶屋)

車を引のやのどらやきはなしか(十三丁表)

●寛政四年『桃太郎発端話説』(山東京伝作、勝川春朗画、

鳶屋)

ひきのやのどらやき さつまいも よものたきすい
といふばしよも なしのきりくちといふせんさくさ
(二丁表)
たからをせしめうるしとで、 どらやきさつまいも
のくいあきをしませう(十丁裏)

以上のように、「どらやき」および「さつまいも」はお
いしい食べ物を例示する際に用いられているが、初期草双
紙においては鱗形屋板に限って使用されている。また、「ど

「どらやき」さつまいも」それぞれの使用例を比較してみると、「どらやき」は単独でもおいしい食べ物为例示する言葉として使用されているが、「さつまいも」は「どらやき」と一対で扱われることによりその意味を成す。

大田南畝は初期草双紙にみえる言語遊戯の語句に注目していたらしく、『寝惚先生文集』の後にもいくつかの言及がなされている。

天明元年（一七八一）の黄表紙評判記『菊寿草』の序文では、「たいのみそずによもの赤のみかけ山のかんがらす 大木のはへぎはふといの根 がてんか〜」という詞章が、安永四年（一七七五）『金々先生栄花夢』刊行以前の鱗形屋板草双紙の特徴を端的に表すものとして挙げられている。

また、『二話一言』⁴巻八には言語遊戯の語句を作中に多用した鱗形屋板草双紙の作者に関する情報を記している。

鱗〈形〉屋孫兵衛方絵双紙作者は、津軽侯内に居候吉右衛門と申候軽き者之作之よし。あだ名をおぢいと申候。鯛の味噌づでよもの赤のみかけ山のかん烏などいふことば、此男のいひ出せし也と右藩中之人の話也。

南畝自筆本『二話一言』の巻七の裏表紙見返しに「天明

四五年の頃集む」、巻九の巻末に「天明七年丁未八月より八年戊申六月望にいたる」とあることから、この記事も天明期に記されたものと推定される。

『寝惚先生文集』以来、南畝が草双紙に使用される言語遊戯を挙げる場合、例示されるのは「鯛のみそず」「四方のあか」（一ぱい）のみかけ山のかんがらす」が定型であったようだが、このような草双紙の言語遊戯について、少なくとも二十年に亘って関心を寄せていたことが確認できる。

南畝は寛延二年（一七四九）生まれで、現存資料のうち最初の黒本青本とされる『丹波爺打栗』が刊行された延享元年（一七四四）にはまだ生まれていなかったが、鱗形屋板の草双紙で言語遊戯の語句が一作品中に複数使用される作品が見られるようになったころは少年期であった。『寝惚先生文集』刊行時には十八歳であったが、当時も鱗形屋では同じ傾向の草双紙の刊行がなされていたことが確認できる。⁵

「どらやきさつまいも」は『寝惚先生文集』に取り上げられている。しかし、言語遊戯の語句と鱗形屋板の草双紙とを結びつける見解を作中に明示している『菊寿草』『二話一言』には「どらやきさつまいも」の語は見えない。『寝惚先生文集』では「読絵草紙」と題しているだけで、鱗形

屋の名は挙げられていない。しかしながら、管見の限り、おいしい食べ物为例示するために「どらやき」や「どらやきさつまいも」の名を挙げるのは、『寝惚先生文集』刊行当時、鱗形屋板初期草双紙においてのみ確認されるものであった。よって、青少年期の南畝の関心を引きつけたのも、鱗形屋板草双紙であったものと考えられる。

また、「どらやき」と「さつまいも」を二語一対のものとして列举する際に、「どらやきさつまいも」のように、「どらやき」を先に示すという形は、宝暦期末には刊行されていたと想定される『駒軍象戯始』に用例がみえ、以降、安永五年『風流／上下の番附』の時点でも存在していることから、明和初年には既に定着した形であったと想定される。よって、『寝惚先生文集』に示された草双紙の姿には、ある程度リアリティがあると評価できる。

一方、用例後半の、新規参入の草双紙作者によって成された、いわゆる黄表紙の中で散見される「ひきのやのどらやき」という語は、本来は存在しなかったものと推定される。鳥居清経画の鱗形屋板『おなら』に「ひきのやのあんころ 藤つかやのどらやき」とあるように、「ひきのや」の名物はあるころ餅であつて、どらやきではない。これは、一部の作者が「ひきのやのあんころ」と「どらやきさつまいも」を混同して誤った形を生み出し、それが踏襲された

ものと考えられる。⁶⁾

鯛のみそず・四方のあか

「鯛のみそず」と「四方のあか」は、酒肴と酒の取り合わせである。草双紙にみえる酒および酒肴について通観するために、各用例をいくつかのパターンに分類し、私に記号を付し、整理した。分類内容は以下の通りである。

● 「四方のあか」に「鯛のみそず」が取り合わされた例

◎ 「四方のあか」に「鯛のみそず」以外の酒肴が取り合わされた例

○ 「四方のあか」以外の酒に酒肴が取り合わされた例

▲ 「四方のあか」が単独で登場する例

△ 「四方のたきすい」など、「四方のあか」以外の酒が単独で登場する例

□ 酒と列举はされないが、明らかに酒肴として料理・食べ物が挙がる例

△ 刊年不明『狐の姫いり』（伊賀屋か）
このさけはしんもろはくそうな きつくにほひかよ
い いつはいのみたい（一丁裏）

◎刊年不明『狼に衣』（奥村利信画、奥村）

それはたこではのめまいから としまやのでんがく
でもかいにやろうか（六丁裏）
おふかみのすいものてよものあかをのもふではない
か（七丁表）

▲宝暦・明和ごろ（赤本）『猿蟹合戦』（画者・板元不明）

にしのみやのはんへんでよものあかをあげませふ
（七丁表）

▲宝暦六年『山椒太夫／老花骨』（鱗形屋）

これはよものあかだ（七丁表）

▲宝暦八年『鐘銘／道成寺根元記』（鱗形屋）

とてもの事によものあかで一はいたべたいものだ
（七丁表）

△□宝暦十年『知仁勇／三鼎金王桜』（鱗形屋）

何かなしにあすのばんみそずでたらふくのませて三
人ともぶつちめて 国とら様からごほうびにあづか
りたいのはまやきをしてこまそ（八丁裏）※「あづ
かりたい」と「鯛の浜焼き」を掛ける。

わつさりとたきすいをのみかけめりやすとでかけま
せう（十五丁表）

▲宝暦十二年『童子廓雛形』（鱗形屋）

いやもふこゆるされ 四方のあかでももふならぬ

（五丁表）

◎□刊年不明『駒軍象戯始』（鳥居清満画、鱗形屋）

いつでもよものあか たきすいは大あたり のめ
く（三丁裏）

ふぐの太良もときを申つけました じわりとのみ
なさいよ（三丁裏）

そのあととはあんかうのみそつでいつみ町とでもお
しきせく（六丁表）

▲刊年不明『三官／和唐内雅立』（鳥居清経画、鱗形屋）

御礼にはよものあかを上ませふ（四丁表）

▲刊年不明『煙草恋中立』（鳥居清倍画、鱗形屋）

まぐばやまのたにそこによものあかをたのしみ（九
丁表）

▲刊年不明『柳にまり』（鳥居清満画、鱗形屋）

けさからいぬを引てくたびれじるし ちとよものあ
かをしかけたい（六丁表）

△刊年不明『江州／手孕邑昔語』（鱗形屋）

上諸白（十一丁表）

△刊年不明『錦木物語』（鱗形屋）

はやくかへつていせやをいつはいいしてこませるは
（六丁表）

△刊年不明『男珠取』（鱗形屋）

まつ いわいによものたきすいく (二丁表)

□明和三年『雪こんく御寺の茶木』(富川房信画、奥村) 是からしめておいたにわとりにねぎをいれてすいものにして 四五はいのみかけ山とたのしもふ (二丁裏)

△明和五年『富士箱根／曾我旧跡』(鱗形屋)

上諸白有 (一丁表) 名物ふじの白酒 (十五丁表)

□明和六年『本草綱目／春霞清玄風』(鳥居清経画、鱗形屋) もく印も大かたまいよくふぐ汁とでかけるあらうがや (十丁裏)

此あととははたじろのみそづいもののみかけ山のおなが鳥 (十丁裏)

▲明和七年『おなつ清十郎／契約石宝殿』(鳥居清経画、鱗形屋)

ちとこ、らてよものあかとでたいがさかやはないか (九丁表)

ほねをりによものあかでもあがれ (十三丁表)

△明和七年『近江国犬神物語』(鳥居清経画、鱗形屋) 此はこをひき上じるとでかけ山 それでたきすいを一斗のめかけた (二丁表)

◎安永元年『柿本人麿／明石松蘇利』(鳥居清経画、鱗形屋) おらならば かるわざより此うさぎにねぶかを入れて

すいものをこしらへて よものあかとでかけたい (十一丁表)

◎安永元年『竹斎筍斎／悴褒医』(鳥居清経画、鱗形屋) まづ御ちさんのたいをうしほにして、四方のあかをいだし (十丁表)

△安永元年『悪源太忿怒霹靂』(鳥居清経画、鱗形屋)

此せかいでほんのたきすいとでかけやまだ (十三丁裏)

□安永二年『梅漬／膏惚葉』(鳥居清経画、鱗形屋)

ちとまたのみかけしるし わつさりとしたみそづきを申つけました (十丁表)

□安永二年『魁魁太平記』(鳥居清満画、鱗形屋)

このおちやのあとははたじろのみそづを申つけました (七丁表)

▲○刊年不明『源太夫』(鱗形屋)

とうかい道はよものあかはよし (二丁表) あたつたらしいのやきみそでたきすいをだしませふ (五丁表)

□刊年不明『八わたしらず』(鳥居清経画、鱗形屋)

このはとをぞうすいにしてさぞうまかるふ しかしのみかけ山もよかるかへ (十五丁裏)

△刊年不明『おなら』(鳥居清経画、鱗形屋)

大極上血池諸白（三丁表）

鱗形屋

●安永四年『六道／水車智恵篁』（鳥居清経画、鱗形屋）

なんぞみそづであかを申つけやう 中の町ときて一
はいのみかけやまとてやう（十五丁表）

●安永四年『大福／富突始』（鳥居清経画、鱗形屋）

このあとでは御さちれいのたいのみそづでよものあ
かをきこしめしませう（十丁表）

●安永五年『風流／上下の番附』（鳥居清経画、鱗形屋）

それ みのどのへあかをしんぜろ あ、何もさかな
がお、それく ますのすしがあつた ざつとみ

そづを申ました（三丁表）

●安永五年『うどんそば／化物大江山』（恋川春町画、鱗形屋）

五人うちよつて たいのみそづでよものあか ちよ
んのおごとりと出かけける（八丁裏）

●安永六年『花粧対兄弟』（柳川桂子作、鳥居清経画、鶴屋）

サアいわぬに四方のあかでないのうしほにのみかけ
山のみそさ、いとでかけ山（八丁裏）

●安永六年『花見帰鳴呼怪哉』（深川錦鱗作、恋川春町画、鱗形屋）

山のみそさ、いとでかけ山（八丁裏）

※既出。

●安永六年『親敵討腹鞍』（朋誠堂喜三三作・恋川春町画、

此おみきはよものあかとのめます たいのみそづよ
りあぶらねづのことだ（二丁表）

▲安永六年『三舩増鱗祖』（恋川春町画、鱗形屋）

すみなれし都のふじをあとに見てゆきのむらきへ四
方白く夕日てりそふ四方の赤これを合て八けいや
（二丁表） ※道行の景色として掲出。

●安永七年『藤沢入道／熊坂伝記』（鳥居清経画、鱗形屋）

こよひはよいとりがかつた、よものあかにいたそ
う（十丁表）

○安永七年『玉屋新兵衛／夢中海原』（鳥居清経画、鱗形屋）

なんぞみそづてたきすいがいたゞきたひ（四丁表）

▲安永七年『大内義隆／柳之夫婦命』（鳥居清経画、鱗形屋）

されはくとうぞよものあかをたべたい（一丁表）
それ さけのかんせよ あてはますのすしときたは
（四丁裏）

▲△安永七年『酒吞宝易占』（鳥居清経画、鱗形屋）

これでは四方のあかものまれぬ（十丁裏）
酒吞宝うらないがあたり 三人のものともより金銀
四方のあかはもちろん おとこ山にけんびし 山の
ことく（十五丁裏）

●安永七年『辞闘戦新根』（恋川春町画作、鱗形屋）

※既出。

○安永八年『其数々酒の癖』（市場通笑作、鳥居清長画、

奥村）

ちとあかはおもかろう すましのうどめといふところだ おいらはたいよりぼたんかみみじでのみたい（十二丁表）

□安永九年『いろは歌』（勝川春泉画、板元不明）

なかなをりて一しほめてたいのすいもの（五丁表）
※「めでたい」と「鯛の吸い物」を掛ける。

□天明元年『突渡蝦早恵栄』（市場通笑作、鳥居清長画、

奥村）

めでたいのはまやきをあけませう（十五丁表）※「めでたい」と「鯛の浜焼き」を掛ける。

●天明二年『御存商売物』（北尾政演画作、鶴屋）

※既出。

□○天明三年『悪抜正直曾我』（恋川春町画作、鱗形屋）

ほとけだなのかばやきで一はいのみかけ山のふるいことたかみそさしい（六丁裏）

なんでもばんに吸ものにして よものたきすいだぞ（十四丁表）

▲天明三年『草双紙年代記』（岸田杜芳作、北尾政演画、

泉市）

しゅびよくまいれば ほうひは四方のあか、ひきのやのあんころじや がてんかく（二丁裏）

●天明三年『江戸錦／楊柳桜草』（宿屋飯盛作、勝川春林画、

板元不明）

錦の袋入の底の心をくみ給へと 鯛の味嘈すで四方の赤良 のみ懸山の麓に記す（十五丁裏）

●天明四年『吉原大通会』（恋川春町画作、岩戸屋）

とり入たる所がなかくもつてこんみりとして たいのみそづによものあかと言うとこなれば（十丁裏）

●天明八年『悦鬚蝦夷押領』（恋川春町作、北尾政美画、

葛屋）

むかしならば たいのみそづに四方のあか一ツはいのみかけ山といふばだ（十三丁表）

●天明八年『鎌倉太平序』（恋川春町画作、鱗形屋）

きやう言を二さつ目のきりまでつとめければ 御ほうびとして 鯛のみそづによものあかをくだされける（十丁裏）

以上のように草双紙では、休憩を欲する場面や労をねぎらう場面などで、おいしい酒やそれに合う酒肴を挙げる台詞が散見される。「鯛のみそず」は鯛を味噌仕立てにした吸

い物だが、他に鯛の浜焼きや潮汁、河豚や鮫鱈の汁物、鶏・兎・鳩など鳥獣の料理も挙げられている。

全体的な変遷としては、初め酒の銘のみを挙げるのが一般的であったのが、次第に酒肴を取り合わせるようになっていったことが看取できる。また、初期草双紙においては、やはり鱗形屋板の用例が多くを占めている。

「四方のあか」については、由来が明確でなく、赤味噌を指すとの説もあるが、草双紙にみえる用例は全て酒を指すものと解せる。

例えば、『宝暦期後半に刊行されたと推定される『三官／和唐内雅立』では「どらやきでもきすでも 望みはないか」(七丁表)と、褒美として「どらやき」と酒の意の「きす」を挙げている。この作品には「御礼には四方のあかを上ませふ」(四丁表)という書き入れもあることから、「きす」の实体は「四方のあか」であることが分かる。よって、同様に他作品中で挙げられている「四方のあか」もまた酒を指すものと推定される。

安永七年『大内義隆／柳之夫婦命』「されはくとうぞよものあかをたべたい」の「たべる」は、「飲む」「食う」の両義を持つが、この場合、他に酒や飲酒を意味する言葉がないため、酒肴としての赤味噌とは解し難く、飲酒を意味するものと推定される。

また、「四方のあか」が四方屋の酒銘「滝水」を指すか否かという問題についても、現時点で答えを出し難い。

鱗形屋板の初期草双紙を中心に、「四方のあか」とは別に「滝水」という用例が散見されるが、安永元年刊行の鱗形屋板で、鳥居清経画という同じ条件の二作品に、それぞれ以下のような用例が確認される。

まづ御ぢさんのたいをうしほにして四方のあかをいだし(十丁表)

(『竹斎筍斎／悴褒医』)
(『悪源太忿怒霹靂』)

同じ趣旨で「四方のあか」と「滝水」が挙げられている。この場合、両者が同じものを指していることと解することに支障はないが、同じでなければならぬということでもない。

宝暦期後半に刊行されたと推定される『駒軍象戯始』(鳥居清満画、鱗形屋板)では「いつでも四方のあか 滝水は 大当たり 飲めく」と、両者が列挙されている。この用例が「四方のあかおよび滝水の二種」を意味すれば、四方屋には「滝水」とは別の「あか」という酒銘が存在していたことになるが、「あか」が酒を意味する場合、「四方屋の

酒であるところの「滝水」となり、「四方のあか」は「滝水」を指すことになる。

以上のように、この問題に結論は出し難いが、両者は共に鱗形屋板の初期草双紙に言語遊戯の語句が多用されたのとおおむね同じ時期に、鱗形屋板の草双紙を中心に散見されるものであることが確認される。

「四方のあか」と「鯛の味噌ず」を取り合わせた早い例は安永四年『大福／富突始』である。明和四年『寝惚先生文集』に「鯛味噌津四方酒」の語がみえるが、宝暦期末から明和初年にかけての草双紙に、この組み合わせは確認できない。ただし、安永元年の時点で「四方のあか」と酒肴とを取り合わせた例があること（『竹斎筍斎／悴褒医』）や、先掲の通り『寝惚先生文集』にこの組み合わせが取り上げられ、南畝の言語遊戯に関する言及にある程度の信憑性が期待されること⁽⁸⁾からいって、明和初年ごろの草双紙中に「四方のあか」に取り合わせる酒肴のひとつとして「鯛のみそず」が既に存在していた可能性が考えられる。

ただし、「四方のあか」と「鯛のみそず」を一對とする形は、鱗形屋板初期草双紙にみえる複数の組み合わせのひとつであったものと考えられる。様々なバリエーションのひとつに過ぎない「四方のあか」と「鯛のみそず」の組み合わせが、後の作品において定着したのは、「四方赤良」

という狂号を使用していた大田南畝の影響が大きいものと考えられる。

言語遊戯の洒落言葉が草双紙の変遷の中で辿っていくと、黄表紙特有の取り入れ方がみられる。初期草双紙での素朴な用法と、いわゆる黄表紙における趣向としての利用の分岐点を探ると、それらは恋川春町や朋誠堂喜三二の作品にあるようにもみえる。しかし、その黄表紙の草創期を支えた作者たちは、少なからず大田南畝の影響を受けたものと推測される。大田南畝は自身が手掛けた草双紙の作品数こそ少ないものの、草双紙の新しいかたちの形成に大きな影響を与えたものと考えられる。

注

- (1) 他に「てん上みたか」と「とんだ茶釜」がある。「てん上みたか」は「参ったか（思い知ったか）」の意。「とんだ茶釜」は笠森お仙評判と明和七年のお仙の出奔騒動に起因した流行語。拙稿「草双紙における流行語の位置」『近世文芸』第六十八号、日本近世文学会、平成十年六月）参照。

(2) 『大田南畝全集』第一卷（昭和六十年、岩波書店）所収。

(3) 正徳三年刊『西海太平記』（中嶋又兵衛板）五之卷の二「幽

霊の当惑は妄執の雲助」に「むかしは酒の糟を両徳といひしが、酒をきすとなふるより。酒のかすをも酒粕（きすがら）と申。」とある（『八文字屋本全集』第四巻、平成五年、汲古書院）。

(4) 『大田南畝全集』第十二巻（昭和六十一年、岩波書店）所収。

(5) 拙稿「草双紙における流行語の位置」参照。

(6) 拙稿「『草双紙年代記』考——上巻部分を中心として——」（『實踐国文学』第六十九号、平成十八年三月）参照。

(7) 水野稔校注『日本古典文学大系五九 黄表紙 洒落本集』（昭和三十三年、岩波書店）所収『御存商売物』注では「神田和泉町の酒店四方久兵衛で売った赤味噌。銘酒澆水とともに有名。」とする。『江戸語大辞典』（前田勇編、昭和四十九年、講談社）では「赤味噌」は誤りで「澆水」が正しいとする。『日本国語大辞典』（昭和五十一年、小学館）では「四方の澆水」を指すとし、中山右尚『江戸の戯作絵本 続巻一』（昭和五十九年、現代教養文庫、社会思想社）所収『親敵討腹鞍』注では、「四方のあか」は四方屋久兵衛で売る赤味噌のことだが、誤って「澆水」をも「赤」ということがあることから、「澆水」を指す、また、一説にははじめ酒銘を「赤」といったという、とする。『近世子どもの絵本集 江戸篇』（鈴木重三・木

村八重子編、昭和六十一年、岩波書店）では、「澆水」を指すとした上で、「この店（四方屋を指す）で扱った赤味噌を四方赤味噌と呼んだのに由来するらしい」と付記している。『江戸の絵本』（I～IV、小池正胤・叢の会編、昭和六十二年～平成元年、国書刊行会）の注では場合により指すものが異なっている。以上の諸注は酒と味噌には分かれるものの、みな元吉原跡新和泉町の酒屋四方屋久兵衛の店の商品を目指すという点で共通している。対し、宇田敏彦校注『新日本古典文学大系八三 草双紙集』（平成九年、岩波書店）所収『草双紙年代記』注では、「和泉町（中央区日本橋三丁目）の豊島屋で販売した赤味噌」を指すとし、「銘酒の名とする説もある。」と、異なる見解を示している。

(8) 例えば、いわゆる黄表紙の中で初期草双紙を想起させる時代遅れな言語遊戯として「大木の切口太いの根」があるが、これは「大木の生え際太いの根」の誤った形である。しかし、この形は様々な黄表紙の中で使用されている。対し、南畝は『菊寿草』序文の中で「大木の生え際で太いの根」と、正しい形を示している。拙稿「草双紙における流行語の位置」参照。

（まつばら のりこ・実践女子大学非常勤講師

実践女子大学大学院博士課程
平成十四年度単位取得満期退学
博士（文学）